

本郷座の『冥途の飛脚』

近松秋江

〈出典：「新演藝」、大正11年4月〉

近松物は、何といっても東京役者よりも大阪役者でなければ可<sup>い</sup>けない。

梅忠<sup>うめちゆう</sup>は、先年、羽左<sup>うざ</sup>か（ママ）歌舞伎座で演じたのを見たが、その時私は、何かに批評を書いて、あれなら、かく申す私自身の方が巧<sup>うま</sup>いだろうといったことがある。たしかに羽左よりは此の近松秋江の方が巧く演<sup>や</sup>ってみせると思った。

鴈<sup>がん</sup>治郎<sup>じろう</sup>福助<sup>ふくすけ</sup>の梅忠をその後見た時——前述の羽左の時よりもまだまだずっと以前に仁左衛門<sup>にざゑもん</sup>の梅忠を見たこともあったが、その時もあまり感心しなかった。——鴈<sup>がん</sup>福<sup>ふく</sup>のは流石<sup>りうせき</sup>に羽左ほど悪くはないと思ったが、その時は鴈の忠兵衛よりも福の梅川<sup>うめがわ</sup>が好<sup>よ</sup>かった。

そんな、臆<sup>おそ</sup>ろな記憶を、比較の標準の背景に持っていながら今度の本郷座の我童<sup>がどう</sup>の忠兵衛は、どんなに演ずるであろうかという好奇心も抱いて、一寸覗<sup>のぞ</sup>いてみたいと思っていた。

そして偶然の機会<sup>きかい</sup>で一日見てしまった。我童の忠兵衛は、前三者の忠兵衛に比べて優るとも決して劣<sup>せう</sup>っているものではない。少くともたしかに羽左、仁左のよりも好<sup>よ</sup>いし、それから——之は私の主観<sup>しゆかん</sup>的の感情<sup>かんじ</sup>かも知れないが鴈の忠兵衛よりも我童のそれの方が何となしに同感<sup>どうかん</sup>が出来るように思われた。何故<sup>なに</sup>というのに、勿論<sup>もちろん</sup>、芸で行くのであって、生地<sup>きぢ</sup>で行くのではないから役者の年齢<sup>ねんねい</sup>やその他を鑑賞<sup>かんじやう</sup>や批評<sup>ひひう</sup>の考慮<sup>こうりゆ</sup>に算入<sup>さんにゅう</sup>することは無益<sup>むえき</sup>のことなのではあるが、私は、何となしに、もう鴈の忠兵衛でもあるまいという気がしているのだ。鴈と我童と年齢はどのくらい違<sup>ちが</sup>っているか知らぬが、幾ら生地で見せるのでなく芸で見せるものであるにしても、思いなしにか我童の方により多くの潤<sup>うる</sup>いがある。

そして、こんな事を申しては、観<sup>かん</sup>せる芝居<sup>しばい</sup>には困<sup>こ</sup>るかも知れぬが、近松という人の作は、度々申すごとく後の出雲<sup>いづも</sup>や半<sup>はん</sup>二<sup>じ</sup>以後の作者<sup>さくしや</sup>とちがって、芸術<sup>げいゆつ</sup>的に、不朽<sup>こくふ</sup>に、人間の真の胸<sup>むね</sup>に触<sup>ふ</sup>れている物であるだけに、作中の人物<sup>じんぶつ</sup>が生一本<sup>きいっぽん</sup>の性情<sup>せうじやう</sup>を伝<sup>つた</sup>えている。決して上滑<sup>かみずり</sup>りのする——所謂<sup>しゆゐ</sup>芝居<sup>しばい</sup>者<sup>しや</sup>式<sup>しき</sup>の軽薄<sup>けいぱく</sup>さなどはない。

もう、所謂<sup>しゆゐ</sup>在来<sup>ざいらい</sup>のお芝居<sup>しばい</sup>も末<sup>すえ</sup>になつた当節<sup>たうせつ</sup>のことゆえ、原始<sup>げんし</sup>近松<sup>きんそう</sup>の復活<sup>ふくわつ</sup>があつても可<sup>い</sup>いのだ。その点<sup>てん</sup>からいへば、無論<sup>もちろん</sup>我童<sup>がどう</sup>だつて、あまりに芝居<sup>しばい</sup>になり過ぎている所<sup>ところ</sup>はあるが、それでも所々<sup>ところどころ</sup>に近松固有<sup>きんそうこゆう</sup>の生一本<sup>きいっぽん</sup>のところが見えていて、見ていた。

二三年前<sup>にさんねんまへ</sup>鴈<sup>がん</sup>が新富座<sup>しんふざ</sup>で少し工夫<sup>くわふ</sup>を変<sup>か</sup>えた封切<sup>ふうせつ</sup>りを演じた時にも思ったが、誠にあらずもがなの工夫<sup>くわふ</sup>変<sup>か</sup>えであつた。あれでは倍々<sup>ますます</sup>近松固有<sup>きんそうこゆう</sup>の生一本<sup>きいっぽん</sup>の性情<sup>せうじやう</sup>が表<sup>あら</sup>れて来<sup>こ</sup>ない。肝腎<sup>かんじん</sup>の封切<sup>ふうせつ</sup>りが、まるで戯談<sup>じやうだん</sup>になつてしまふ。鴈もあまり、ほかの芝居<sup>しばい</sup>のない人だから、同じ物を色々<sup>いろいろ</sup>に工夫<sup>くわふ</sup>を変<sup>か</sup>えようとして、倍々<sup>ますます</sup>悪<sup>わる</sup>くしてしまふと思った。おっと鴈<sup>がん</sup>のことを云<sup>い</sup>う場合<sup>ばあひ</sup>ではなかつた……それで我童<sup>がどう</sup>の忠兵衛<sup>ちゆうべゑ</sup>だが、素直<sup>すぢ</sup>に生地<sup>きぢ</sup>で行つては、見物<sup>けんぶつ</sup>が承知<sup>しやうち</sup>しないというなら、為方<sup>しかた</sup>もないが、我童<sup>がどう</sup>とて——私の理想<sup>りゆうきやう</sup>の標準<sup>ひょうじゆん</sup>からいへば、やっぱり芝居<sup>しばい</sup>をし過ぎるのだ。

淡路町亀屋宅の入口に入って、吉三郎の丹波屋八右衛門に對い、五十両の為替の金を、川の中附の為に、無断で使った詫びごとをいうあたり、忠兵衛の姿態にふっくりとした和か味があって、見ている美しい快感を与える。けれども、現実味の注文からいけば何となく、あまりに遊びがあり過ぎて、切迫した趣を稀薄にしていると思った。が、もともと此の芝居は写実的の物でありながら、それが段々芸術的に洗練され、図案化されて来ているのだから、必ずしも切迫した写実味は出ない方が芝居その物としては寧ろ好ましいのかも知れぬが、私は、あまりに忠兵衛を従来の型の物の通りにして置きたくない。ふっくりとした円味を持ちながらも、近松の原始的に生一本の所を見せて欲しいのである。で、その注文から申せば、鴈よりも我の方が私にはより多く好ましい。第一生れながらの容貌からして我には神経的に急性な所がある。『忠兵衛もとより堪えぬ蟲』と近松の原作にある、あれだ。

西横堀の信濃橋の袂で、羽織おとしの前後の容態動作もなかなか美しかった。そして心理の表現もそれに伴っていた。

新町越後屋の場は前の場よりも一層よかった。が、私は、此場を芝居で見るたびに、何とかして、もっと近松の原作の情調は出せないものかと思う。『えい／＼鳥がな、鳥がな、浮気鳥が月夜も闇も首尾を求めて逢はう／＼とさ・・・』から竹本の浄瑠璃に、悲しい遊女の恋いを利かすあたりの高調した感情を舞台に横溢せしめる工夫はないものか、私は、それは出来ないことではないと思う。

去年の春歌舞伎座で『博多小女郎』の時、博多柳町の奥田屋の幕明きは好かった。この新町越後屋の幕明きも、何故下座で『えい／＼鳥がなあ』を、陽気な中にも悲しい情けをこめて唄わせなかったか。それは芝居によってはやる時もあるのだが、此度の本郷座ではやらなかった。原作のその辺を喰っているの、ひどく物足りなかった。八右衛門の出て、その為に、全く母親妙閑に頼まれて、その事ばかりに越後屋へ話しに来たように思われる。もとより、そうでもあろうが、しかしあの八右衛門のやうし方からいえば、どうしても原作のとおり、其の前後がもっともつと廓情調があってよいのだ。原作の梅川の、あの悲しい恋いに思い饗れた風情は、亀蔵の潤いの乏しい芸では表わし難いかも知れぬが、竹本の浄瑠璃の前後の音楽的詩的気持ちを舞台に漲らすことを、熱心なる役者は工夫し試みてほしい。

我童の忠兵衛——心の氷三百両、身も懐も冷ゆる夜に越後屋に走りつき——の気持は可なりに表われていた。格子戸の外で中で八右衛門が自分の柵下ろしをしているのを立ち聴きしながら、いろいろに表情を変えての仕草も鴈治郎などよりもよく利いていたと思う。それからがらりと格子戸を開けて入ってゆき八右衛門の膝に乗り掛らんばかりにして悲憤の怨みをいうところもよい。封を切る仕草や表情も急迫切実の趣があった。

あとで二人ばかりの舞台になってからの亀蔵は、悪くもなかったが、鴈、福の時ほど舞台に面白味はなかった。それは、いつの芝居であったか、随分前のことだが、福助の梅川が、今の金は堂島のお屋敷の急用金の封を切ったのだと聞かされて吃驚りし、鴈の忠兵衛

と舞台中を転ろげ廻るようにして、<sup>うろた</sup> <sup>おのの</sup> 狼え戦くところ、あれは少し芝居をし過ぎたとも思ったが、福助の梅川の、いかにも遊女らしい風情が溢れていたのがまだ美しく記憶に残っている。

此度の梅忠は、あまりに舞台をうろたえ廻らずに、じっと熱情を籠めた抱擁<sup>ほうよう</sup>をしながら覚悟<sup>き</sup>を定めるところに二人の恋の真心の極致<sup>きょくち</sup>を表わそうとした。

福助と亀蔵との比較は、すこし無理のようだが、福助の梅川でも芝居になり過ぎたが、原作に近い味はその方にあった。今度亀蔵のは、ちと動きが無さ過ぎはしなかったかと思う。そして本当の原作の味は、まだまだ工夫の余地がありそうだ。之を要するに、近松物は、何といても大阪の俳優諸君の方が巧い<sup>ますます</sup>のだから、益々<sup>ますます</sup>原作に就いて近松の原始的の人生味を舞台の上に横溢せしめる工夫をせられんことを囑望<sup>しよくぼう</sup>するのである。